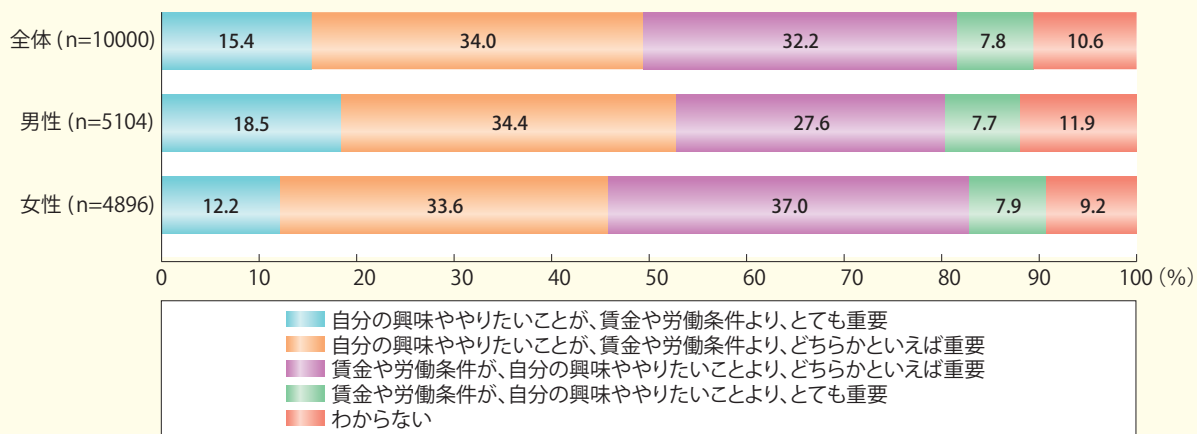


転職する際に重要視することについてみると、「自分の興味ややりたいことが、賃金や労働条件より、とても重要」または「自分の興味ややりたいことが、賃金や労働条件より、どちらかといえば重要」と回答した者は49.4%、「賃金や労働条件が、自分の興味ややりたいことより、とても重要」または「賃金や労働条件が、自分の興味ややりたいことより、どちらかといえば重要」と回答した者は40.0%であった。

また、男女別に転職する際に重要視することについてみると、「賃金や労働条件が、自分の興味ややりたいことより、とても重要」または「賃金や労働条件が、自分の興味ややりたいことより、どちらかといえば重要」と回答した女性は45.0%であり、男性の35.3%よりも多かった（図表14）。

図表14 転職する際に重要視すること

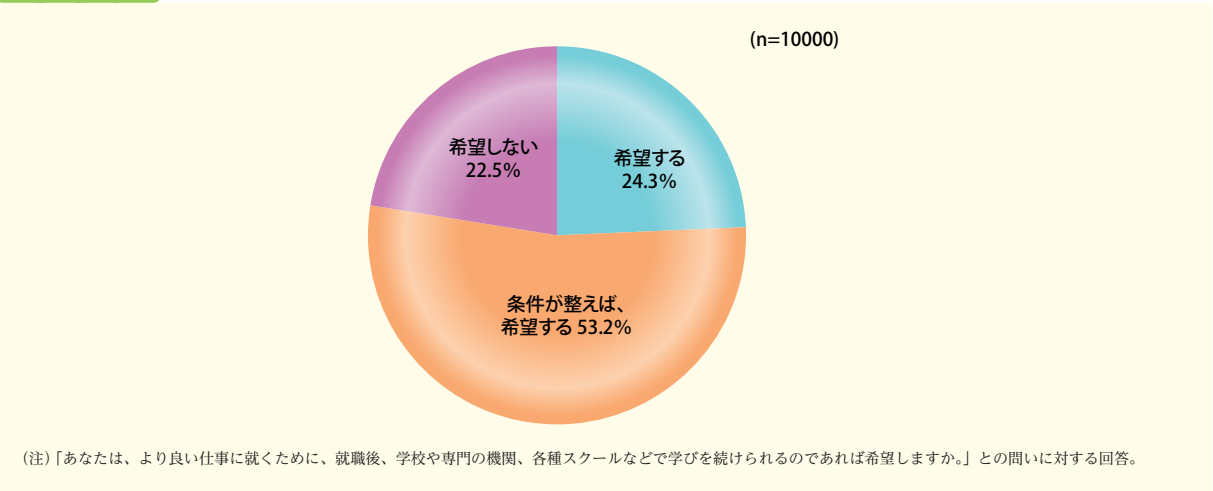


(注)「転職する機会があるとしたら、どちらかといえば、自分の興味ややりたいことに合うことが重要ですか。それとも賃金や労働条件が重要ですか。」との問いに対する回答。

カ 学びの継続希望

より良い仕事に就くために就職後も学び続けることを希望しているかどうかについてみると、「条件が整えば、希望する」と回答した者が53.2%で最も多く、「希望する」が24.3%、「希望しない」が22.5%であった（図表15）。

図表15 学びの継続の希望度



(注)「あなたは、より良い仕事に就くために、就職後、学校や専門の機関、各種スクールなどで学び続けられるのであれば希望しますか。」との問いに対する回答。

(4) 働くことへの不安と相談状況について

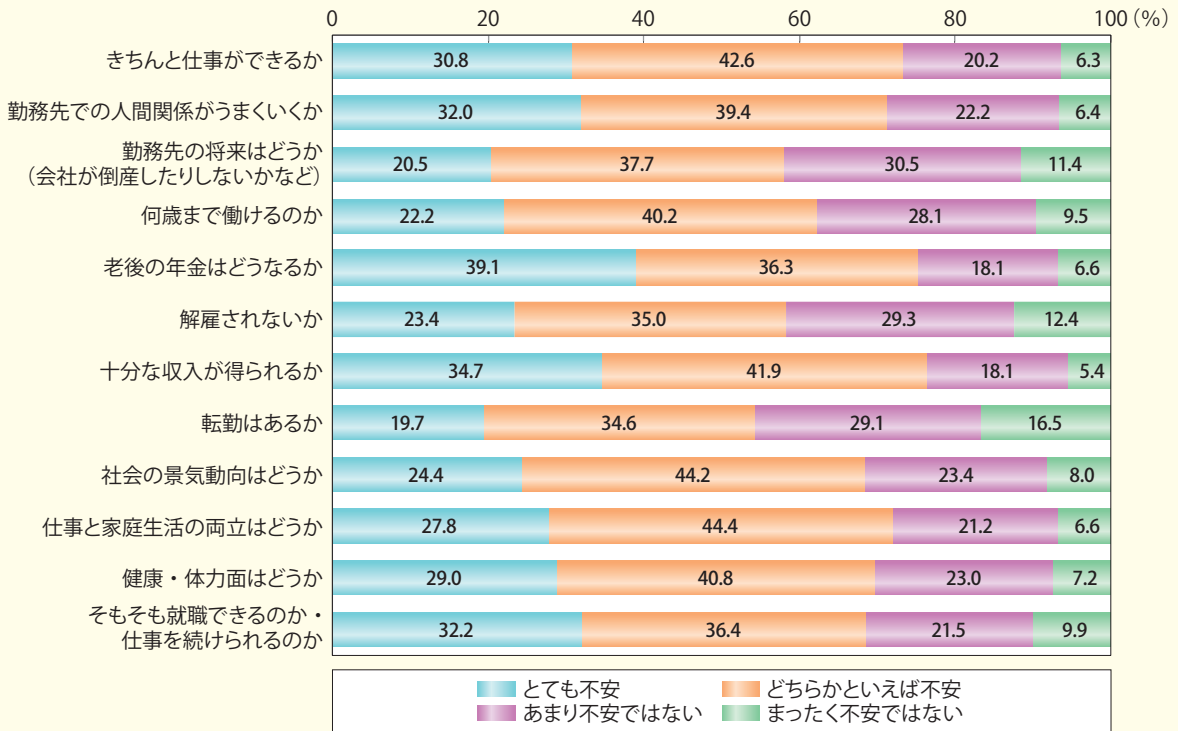
ア 不安の傾向

働くことに関する不安についてみると、「十分な収入が得られるか」に、「とても不安」または「どちらかといえば不安」と回答した者が76.5%で最も多く、次いで多かった項目は、「老後の年金はどうか」の75.4%、「きちんと仕事ができるか」の73.5%、「仕事と家庭生活の両立はどうか」の72.2%、「勤務先での人間関係がうまくいくか」の71.4%であった。平成23年度の調査時と比べて、「とても不安」または「どちらかといえば不安」と回答した者は、全ての項目において少なかった(図表16)。

図表 16 働くことに関する不安

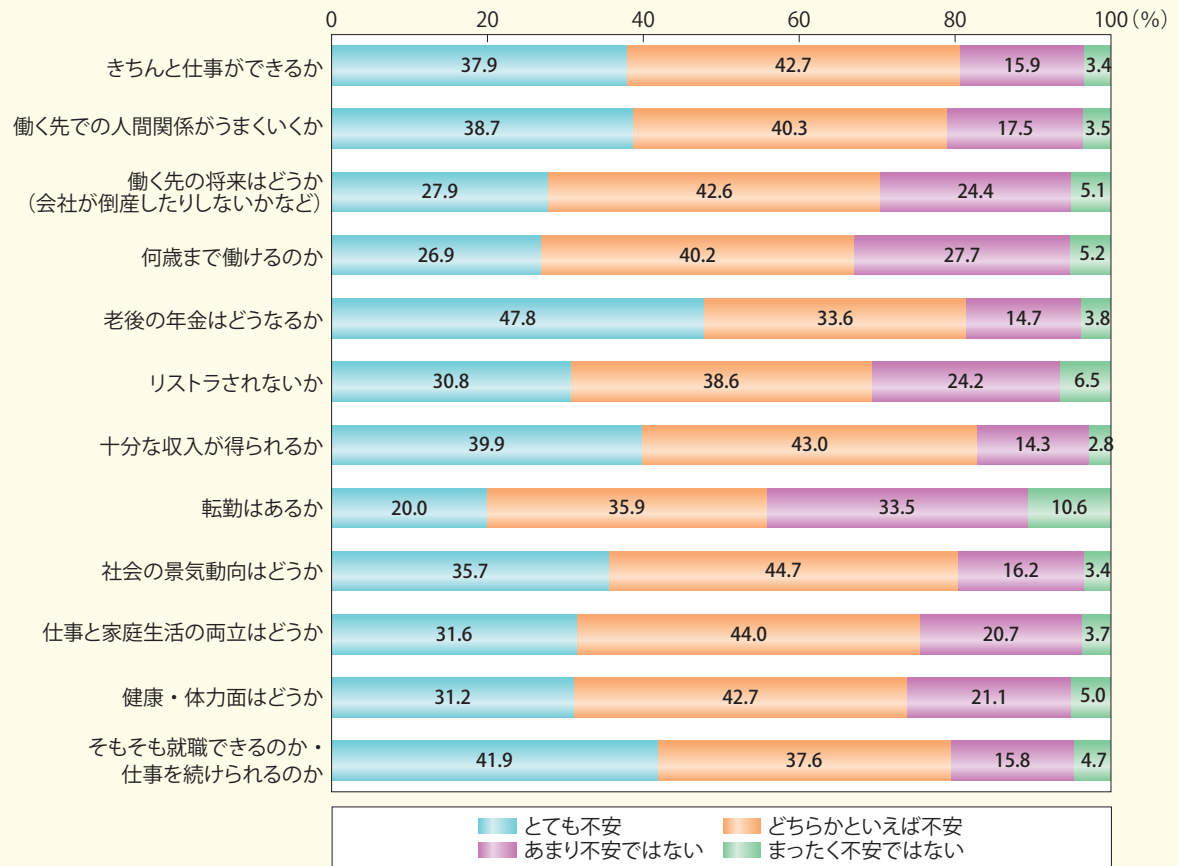
平成 29 年度調査

(n=10000)



平成 23 年度調査

(n=3000)

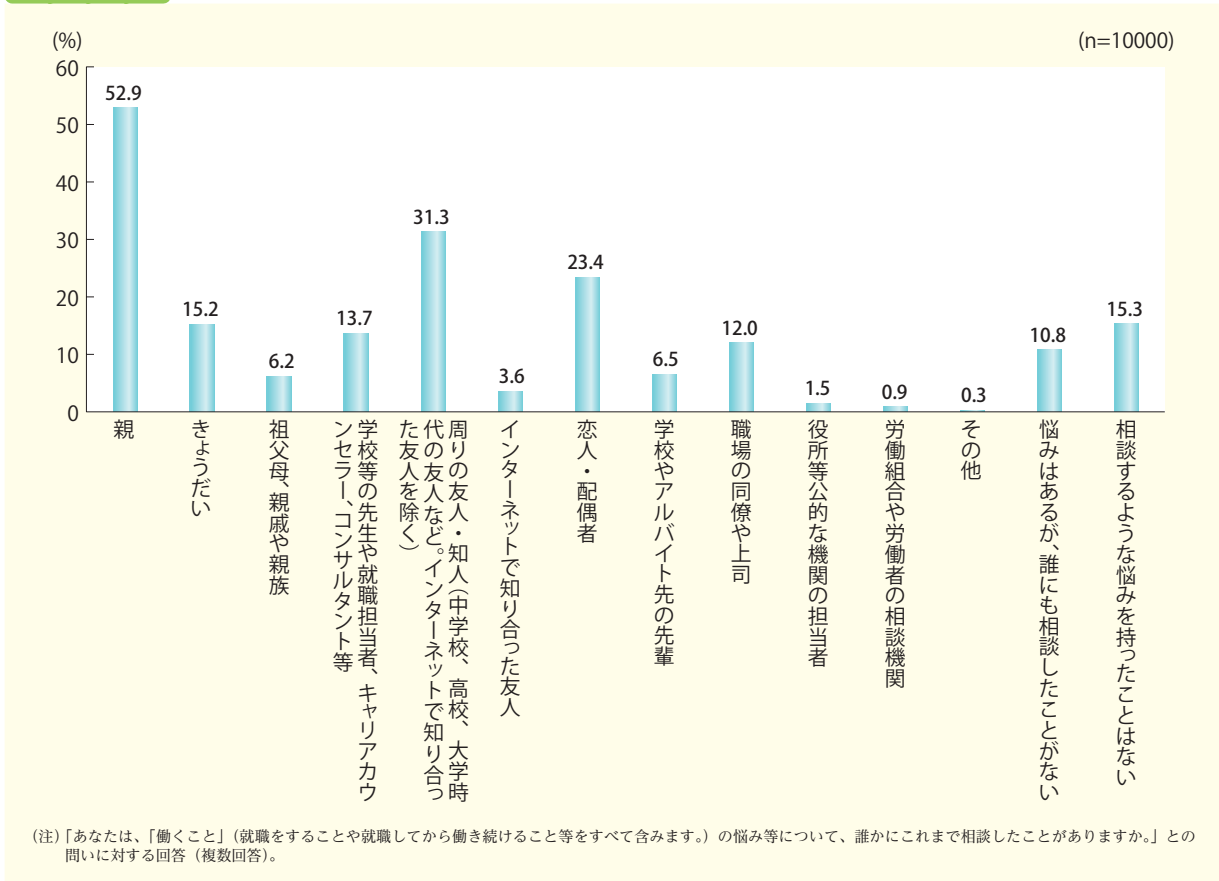


(注) 平成 29 年度調査、平成 23 年度調査：「あなたは、働くことに関して、現在または将来、各項目についてどのくらい不安ですか。」との問いに対して、各項目について「とても不安」、「どちらかといえば不安」、「あまり不安ではない」、「まったく不安ではない」と回答した者の割合。

イ 相談相手

働くことの悩み等について相談した相手についてみると、「親」と回答した者は52.9%、「周りの友人・知人（中学校、高校、大学時代の友人など。インターネットで知り合った友人を除く）」と回答した者は31.3%、「恋人・配偶者」と回答した者は23.4%であった。また、「悩みはあるが、誰にも相談したことがない」と回答した者は10.8%であった（図表17）。

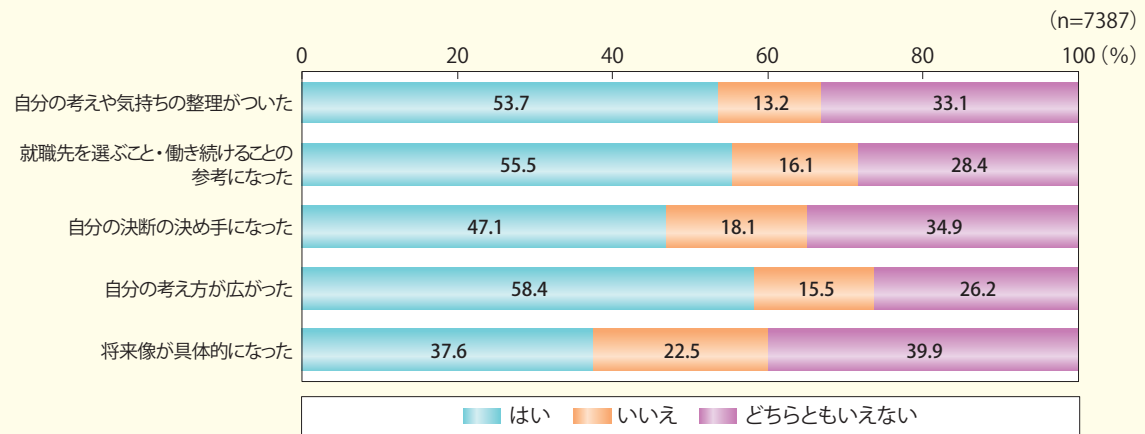
図表 17 相談相手（複数回答）



ウ 相談効果

働くことの悩み等について相談したことがどのようなことに役に立ったと考えているかについてみると、「自分の考え方が広がった」と回答した者が58.4%、「就職先を選ぶこと・働き続けることの参考になった」と回答した者が55.5%、「自分の考えや気持ちの整理がついた」と回答した者が53.7%であった（図表18）。

図表18 相談の効果



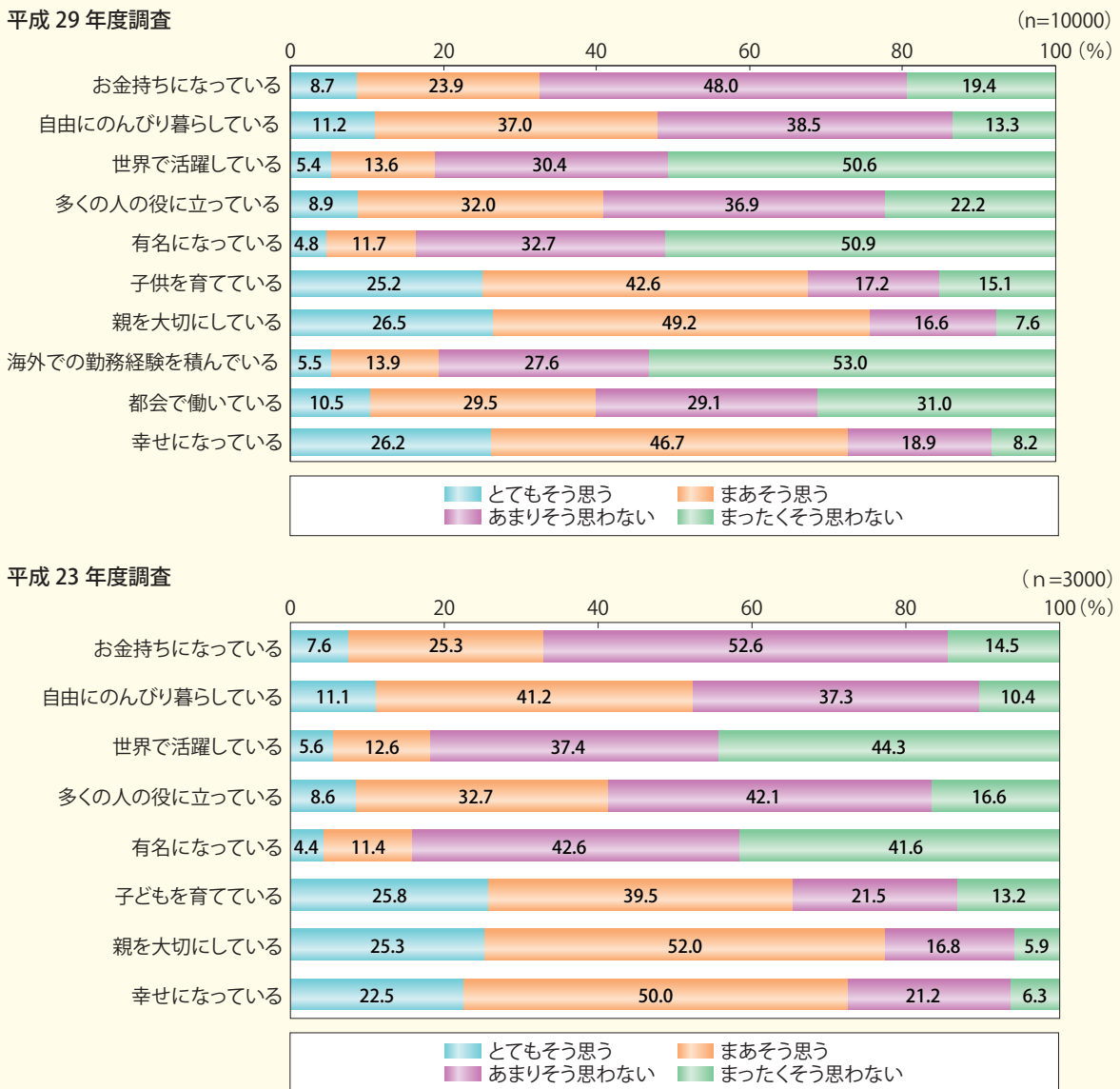
(注)「働くことの悩みを相談したことがある」者を対象に、「相談した結果がそれぞれの項目に役立ちましたか」との問いに対して、各項目について「はい」、「いいえ」、「どちらともいえない」と回答した者の割合。

(5) 将来の展望について

40代の将来像についてみると、「親を大切にしている」に、「とてもそう思う」または「まあそう思う」と回答した者が75.8%で最も多く、次いで多かった項目は、「幸せになっている」の73.0%、「子供を育てている」の67.8%であった。一方、「有名になっている」に、「とてもそう思う」または「まあそう思う」と回答した者は16.5%、「世界で活躍している」は19.0%、「海外での勤務経験を積んでいる」は19.4%と少なかった。

平成23年度の調査時には、「親を大切にしている」に、「とてもそう思う」または「まあそう思う」と回答した者が77.3%で最も多く、次いで多かった項目は、「幸せになっている」の72.5%、「子供を育てている」の65.3%であった。一方、「有名になっている」に、「とてもそう思う」または「まあそう思う」と回答した者は15.8%、「世界で活躍している」は18.3%と少なかった(図表19)。平成23年度の調査時から追加・変更した項目があるため、全体としての単純な比較は困難であるが、共通の項目については、平成23年度の調査時と同様の傾向であったと考えられる。

図表19 40代の将来像



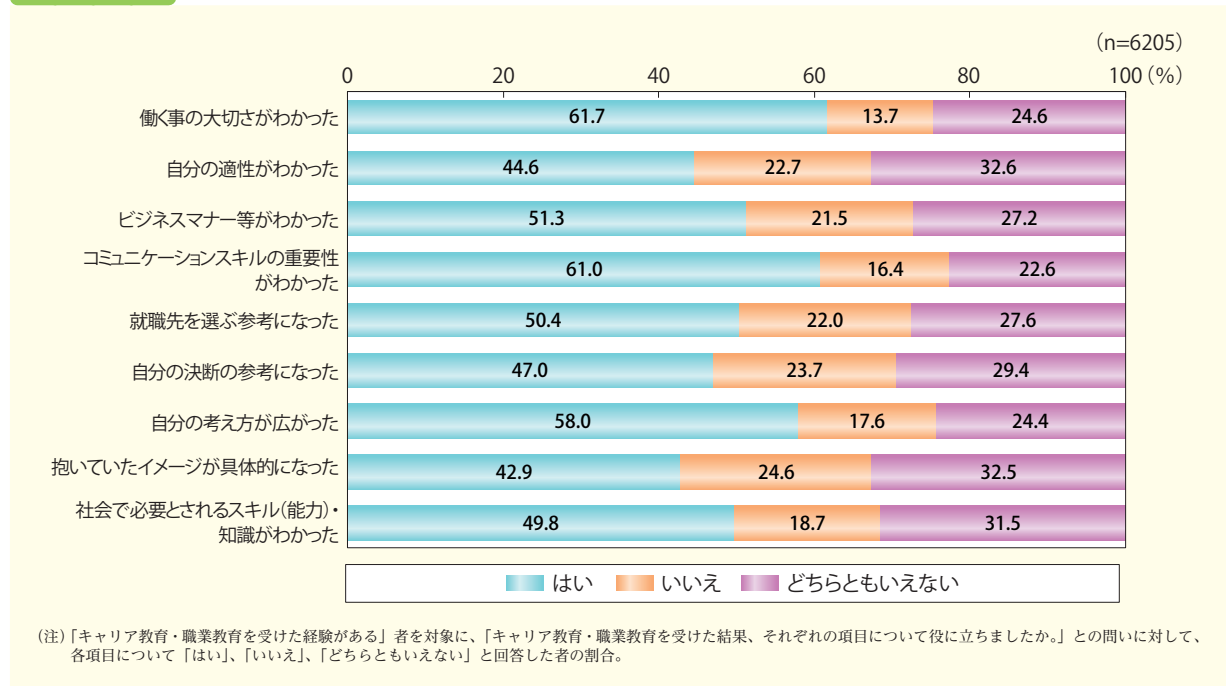
(注) 平成29年度調査、平成23年度調査：「あなたが40歳くらいになったとき、どのようになっていると思いますか。」との問いに対して、各項目について「とてもそう思う」、「まあそう思う」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」と回答した者の割合。

(6) キャリア教育・職業教育について

ア 教育の効果

受講経験があると回答した者が、キャリア教育や職業教育を受けた結果、役に立ったと考えている効果についてみると、「働く事の大切さがわかった」が61.7%で最も多く、次いで多かった項目は、「コミュニケーションスキルの重要性がわかった」の61.0%、「自分の考え方が広がった」の58.0%、「ビジネスマナー等がわかった」の51.3%、「就職先を選ぶ参考になった」の50.4%であった（図表20）。

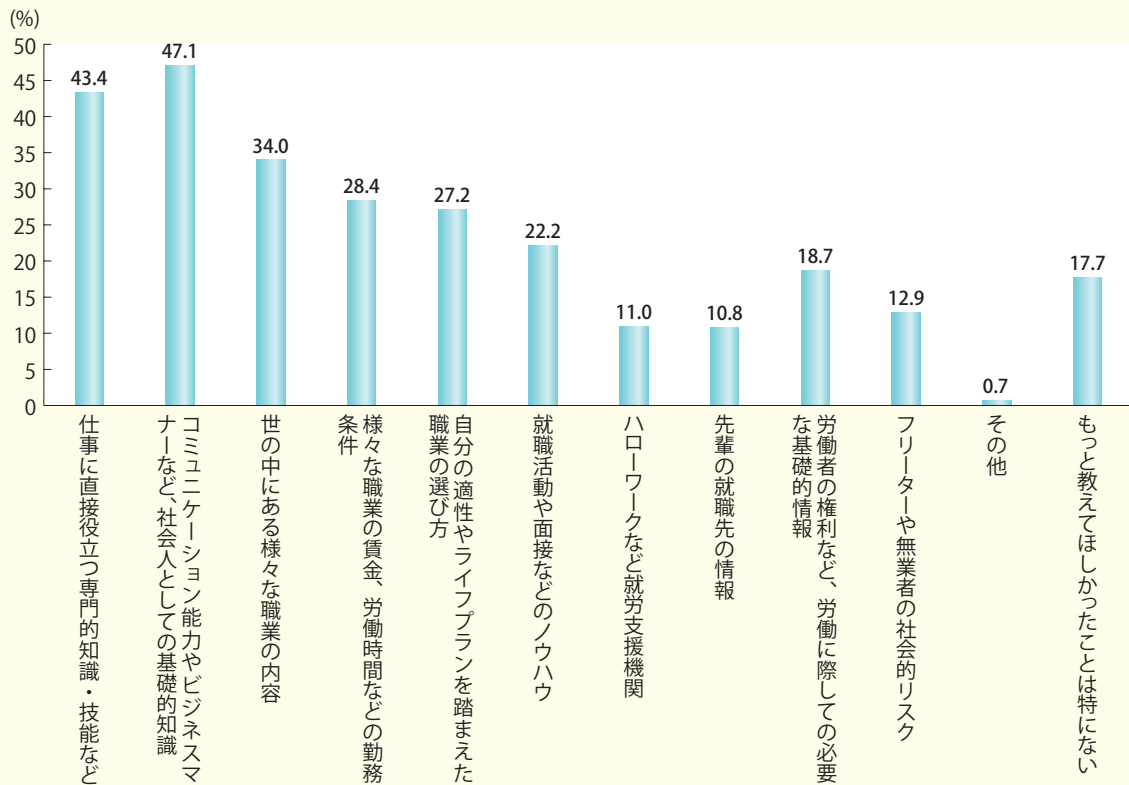
図表20 キャリア教育・職業教育の効果



イ 就労に関して教わりたかったこと

就労に関して学生時代に教えてほしかったことについてみると、「コミュニケーション能力やビジネスマナーなど、社会人としての基礎的知識」が47.1%で最も多く、次いで多かった回答は、「仕事に直接役立つ専門的知識・技能など」の43.4%、「世の中にある様々な職業の内容」の34.0%であった（図表21）。

図表21 就労に関して教わりたかったこと（複数回答）



（注）「就労に関して、学生時代（小学校、中学校、高等学校、大学等に在学したすべての学校の期間）に、もっと教えてほしかったことを教えてください。」との問いに対する回答（複数回答）。

3 おわりに

平成29年度調査についてみると、就労により十分な収入を得られるのか、きちんと仕事ができるのか、仕事と家庭の両立はできるのか、勤務先での人間関係がうまくいかなどについて、平成23年度の調査より少なくなっているものの、依然として多くの若者が不安を抱えていることが読み取れた。また、仕事よりも家庭・プライベート（私生活）を優先したいと考える若者が増えていること、転職を否定的に捉えている若者がそれほど多くないことや、キャリア教育の効果を感じている若者が多いことなどが読み取れた。

また、人工知能、ロボット、IoTなどのイノベーションの登場により、仕事の内容や働き方などが大きく変わる可能性がある。これに伴い、時間的にも空間的にも、より柔軟なワークスタイルが選択できるようになるのではないかと考えられる。

こうした状況の中で、若者には、各自の意思や能力、置かれた個々の事情に応じて、多様で柔軟な働き方を選択しながら、より良い将来への展望を持ち、社会で活躍していくことが期待されている。若者が、子育てや介護との両立、ワーク・ライフ・バランスなども念頭に置きつつ、自身の暮らし方、生き

方を検討し選択することができるような、キャリア教育や就労環境の整備が求められているといえるだろう。

そこで、本特集の結びとして、若者を対象に、職業について考えるきっかけを提供したり、キャリア形成を支援したりしている取組についての事例をいくつか紹介することとしたい。

(1) 学校外で取り組まれているキャリア教育 ～高知県「とさっ子タウン」～

学校外で子供たちが主役となって、社会の仕組みを学びながら、働くことの意義や様々な職業について考える体験型の取組の一つとして、高知県で実施されている「とさっ子タウン」について紹介する。

「とさっ子タウン」は、小学4年から中学3年までの子供たちを対象に、仕事や遊びを楽しく体験しながら、社会の仕組みや地域への関心を高めるきっかけとして、平成21（2009）年度から毎年子供たちの夏休みの二日間を利用して開催されてきた。



（とさっ子タウンの参加者）

ドイツのミュンヘン市で行われているこどものまち「ミニ・ミュンヘン」を参考にして始められた「とさっ子タウン」は、毎年400名以上の子供が運営する「まち」であり、熱気あふれる学びの場となっている。

「とさっ子タウン」の目的は、地元高知ならではの仕事や文化の体験、子供たち同士のコミュニケーションのほか、社会の仕組みに関心を持つきっかけづくりにある。

「とさっ子タウン」では、市役所や税務署、新聞社、飲食関係の仕事や創作関係、娯楽関係など約40種の仕事を用意されているが、子供たちのアイデア次第で新たな仕事を起業するなど、仕事のバリエーションを増やすことも可能だ。子供たちはそれぞれ好きな仕事を選択して、専門家から仕事を教わりながら、「まち」を育て、運営していく。仕事をすることで仮想通貨「tos（トス）」を給料として得て、その中から税金を払ったり、買い物をしたりすることができる。選挙や議会も開催することができ、子供たちが協力しながら自分たちで自分たちの「まち」を変えていくことができる仕組みになっている。

このように、「とさっ子タウン」を通して子供たちは、社会にはいろいろな仕事があること、その仕事の大切さ、大事さを体験しながら学んでいく。「とさっ子タウン」は、興味を持って社会を真剣に考える最初の重要な機会となっていると言える。

また、「とさっ子タウン」は参加する子供たちのほかに、多くの高校生、大学生等がボランティアとして参加しており、彼らの学びの場ともなっている。

(2) 高校におけるキャリア教育

～岡山県立和気閑谷高等学校の取組～

少子化による地域の衰退を防ぐためには教育の充実が重要という和気町の思いと、特色ある教育活動によって生徒の学力・意欲を伸ばし高校の魅力化を図りたいという和気閑谷高校の思いが一致し、平成25（2013）年度に開始された取組を紹介する。

和気閑谷高校では、地域課題解決学習（総合的な学習の時間）に町役場、町教育委員会、町商工会、地域おこしに協力する人や企業などが協力・協働することを通して、地域の活性化を図るとともに、地域に愛着を持ち地域コミュニティの担い手になる人材を育成し、ひいては高校の魅力を高めることを目指している。

具体的には、和気町役場が地域おこしに協力する人や企業を学習の支援職員として高校に常駐させたり、町教育委員会が主催行事への高校生受入れや高校主催行事への小中学生参加のためのつなぎ役を担ったり、商工会が高校生のインターンシップの受入れ、講師派遣や商品開発の支援などをしたり、駅前商店会が店頭スペースの提供やボランティアの受入れ、講師派遣などをしたりしている。

そのほか、連携・協働する教育関係者、行政、地域、産業界の代表者が集まる連絡会を隔週で行い、情報共有するとともに、地域が必要としていることや支援職員の活動内容などを確認している。また、年5回の魅力化推進協議会では2020年に向けて学校と地域の在り方などを協議し、地域社会と高校双方の持続発展を指向した展開を目指している。

また、就職希望者は全員2年次にインターンシップを行うこととしており、役場や商工会が窓口となって受入れ先などを調整しているが、これを探究型インターンシップと位置付け、職業体験に加えて「働くことに関する現代的課題」について仮説を立て、体験やインタビューを通して仮説の検証や課題解決の提言をまとめることとしている。

さらに、小中学校や町教育委員会と連携し、高校生が小中学生の先生役となり、英語や論語の出前授業や理科実験教室を行ったり、放課後学習支援を行ったりもしている。また、English Campでは、小中学生が英語に親しめるメニューを高校生が企画・実践している。これらは、高校生が主体となったプログラムであり、高校生の責任感や自己肯定感を醸成することができるとともに、小中学生に身近なロールモデルを提示することとなっている。また、連絡会の実施や毎年の学校内外の人々へのアンケート、生徒の到達度チェックなど計画・活動・評価・見直しのプロセスが確立しており、町ぐるみで生徒のキャリア形成を支援する取組となっている。さらに、「こくさいフォーラム in Wake」の開催や海外の高校（中国2校、韓国2校、台湾1校）との姉妹校協定に基づく交流などを通して、国際理解学習を深め、地球規模の視野で考え、地域視点で行動できる“グローバル人材”育成に取り組んでいる。

このように、和気閑谷高校の取組は、地域にある様々な教育資源を最大限に活用し、町内の小・中・高等学校の連携した取組を行政、商工会、地域事業所などが一体となってサポートするものとなっており、学校と町が協働して、多様な機会を子供たちに提供するシステムであるといえる。同時に、高校生の活動をきっかけに地域住民の意識も変容し始めており、町の活性化にもつながっている。



(地元中学校での放課後学習支援)